

# ア ス ク

*Advise and Support Care services*

介護サービス相談サポートセンター  
福祉サービス第三者評価機関  
地域密着型サービス外部評価機関

アスクニュースレター No. 6 1

2016年7月26日

発行 特定非営利活動法人アスク  
発行人 佐藤由紀子

〒325-0074 栃木県那須塩原市松浦町118-189

TEL/FAX : 0287-62-4310

E-mail : npo.asc@nasuinfo.or.jp

web : <http://asc.nas.ne.jp/>

## 理事からのメッセージ

### 猫と暮らせば

永田博子 (ながたひろこ)

7才の頃、天井裏を走り回っていた鼠除けのために猫が我が家に来て以来、30匹（雄21匹、雌9匹）の猫を飼った。結婚し子育て中は猫は飼わなかったが、末の息子が小学校からの帰り道で拾ってきた猫を飼いだしてから約30年、常に複数頭の猫が私の側にいた。捨て猫を拾ったりもらったり、迷い猫がいついたり、我が家で出産したこともある。

恋の季節、我が家に雌猫がいるのをかぎつけて沢山の雄猫が集まってきた。強い雄が雌猫に近い位置に座り、力の順に距離をとって雄猫たちが並んでおり、雌猫が思いを寄せていた気弱な柔らか毛並みの黒猫は後方に座っていた。雌猫が黒猫目指して歩き出すとその後を雄猫たちがぞろぞろついて行った。黒猫は自分の方に雄達が迫って来るのに驚いて逃げ、彼を雌猫と雄猫たちが追いかけるということがあった。その後我が家で雌猫が子猫を生んだ時、その黒猫の子が2匹いた。抱いた時の毛並みですぐわかった。雌は強い雄だけを選ぶとは限らないとわかって「なかなかやるじゃん」とうれしく、その2匹は手放せなかった。

猫も人間と同じように一匹づつ性格が違う。他の猫とうまくつきあえない、来訪者があると必ず挨拶に出てくる、外で猫の争っている声がするとすぐ見に行く、他の猫が可愛がられていると「僕も僕も」と甘えてくる、我が家で生まれた子は座っている私の胸にずっとくっついていて、ご飯が欲しい時以外は孤独でいたいなど、一緒にいても疲れないし飽きないが、野良出身が多いので抱っこされるのを嫌がるのは少しさみしい。

今は4匹、全員野良出身。3匹は12才を越え高齢、1匹は3才くらいの若者。若い猫が来るまでは、我が家は猫も人間も高齢で、私は猫を看取り、母を看取り、夫と私はどっちが先でも・・・と考え静かに暮らしていたのに、若い猫を引き受けてしまって、あと10年は生きなければと思うようになっていく。猫に生かされているようだ。

猫は死に姿を飼い主にみせないとされる。今まで埋葬した猫は9匹で、それもほとんど人の手を煩わせずひっそり亡くなった。行方知れずになった猫の中には、体が弱り死期を悟って家を出る前に挨拶に来た猫もいた。体を引きずってやっと歩いていってそれ以後帰って来なかったのも、あれが最後の挨拶だったのだと思っている。もう帰ってこないだろうとわかって、私は引き留めないことにしている。引き留めても全身全霊の力を振りしぼって出て行きたがるので、猫の意志を尊重してお別れをすることにしたのだ。

猫のように自分の尊厳を自分で守る死に方ができたらと切に思う。

(アスク理事、絵画講師)

非正規雇用や一人親世帯、低年金高齢者などの増加に伴い、暮らしに行き詰まる貧困家庭が“目に見えにくい”形で増えており、子どもの貧困率が16%であると発表されて衝撃が広がっています。アスクは5月8日の総会に合わせて、公開学習会「暮らしを支え、ともに生きる社会とは～貧困と地域社会～」を開催しました。陣内雄次さんの基調講演を再録します。

### NPO法人宇都宮まちづくり市民工房「共助社会研究会」中間報告 『共助社会構築の可能性と課題』

陣内 雄次

※本稿は、NPO法人宇都宮まちづくり市民工房「共助社会研究会」の2014年度及び15年度の研究成果の抜粋です。無断転載、無断コピー等をご遠慮ください。

※2014年度及び15年度研究報告書の合冊本を1冊1,000円（税込み、送料別）で頒布します。市民工房の正会員になっていただける方は、1冊800円（税込み、送料別）。ご希望の方は、下記へご連絡ください。

NPO法人宇都宮まちづくり市民工房事務局

住所 〒321-0931 栃木県宇都宮市平松町561

電話 028-634-9901 FAX 028-649-536 Eメール [utshiminkoubou@yahoo.co.jp](mailto:utshiminkoubou@yahoo.co.jp)

#### 1. 共助社会研究会の調査テーマ

NPO法人宇都宮まちづくり市民工房「共助社会研究会」は、今後の地域社会を考える上で必要と思われる以下の3点をテーマに設定し、2014、15、16年度の3ヶ年で調査研究に取り組むこととした。

- ・高齢者をはじめとした住民の、課題解決活動への参加促進のあり方
- ・行政と市民による事業体や民間企業との関わり方、ならびに行政による支援のあり方
- ・社会的に困難を抱えている人々への支援のあり方

#### 2. 2014年度の成果

##### 「共助社会の実相に迫る」

##### (1) 4つの事例調査先の主な特徴

高根沢町在宅福祉ネットは、栃木県内高根沢町内の高齢者・障害のある人が普通に暮らせる地域づくりを掲げて、在宅支援のため福祉関係団体のネットワークを築いた事例である。普通に暮らせるためには、災害時の対応も想定して連携強化がなされている。

事例2は、東京のNPO法人自立支援センターふるさとの会の取り組みである。東京都台東区の

山谷のホームレスの人々への支援活動から始まり、個別支援にとどまらず、地域での包括ケア、仕事おこし、さらには地域の活性化まで視野に入れて、事業化している。

事例3は、宇都宮市内の雀宮地区での居場所「すずめのお宿」を取り上げた。地域の人々の協力や支援を受けて、あくまでも自主的な活動として40年の歴史を重ねた結果、多世代交流の場となった点が注目される。

事例4は、那須塩原市のNPO法人ゆいの里である。行政との連携により、西那須野駅近くに街中サロン「なじみ庵」を運営しているが、参加を重視し、さらに食を付加した自主的な運営方針で、地域の高齢者にとってなくてはならない居場所になっている。

##### (2) 調査結果概要

調査対象の団体や組織の理念と活動経緯、専門性などが異なる中で特に印象に残ったのは、原則「来るものは拒まず」、即ちつながりを求める者に広く門戸を開いている点である。こうした関係性が築けるのは、民間活動の大きな特徴と言える。一方で、活動を始めた中心人物の献身的な貢献度が高く、財政的な負担が大きいという課題もあるが、継続する中で、協力者が集まり、理解者が増えて、基盤が強化されているのがわかった。中でも、ふるさとの会の事例は、活動の事業化、人材

育成という点で秀逸である。生活保護、介護保険など公的制度の活用を前提としつつ、高齢者世帯、不登校引きこもり、若年無就業者、一人親家庭の貧困など、制度外の支援を必要とする人がたくさんおり、枠に捉われない活動ができる民の力はますます重要になる。

### (3) 4つの事例調査からの学び

それぞれの団体・組織の経緯や活動の蓄積、理念と方向性があるものの、共通するのは次の4点である。1) 支援を求めている対象(住民・会員・利用者)を軸に何が必要かを模索して今日の取り組みを作り上げてきたこと。2) 制度の枠にとらわれず、来るものは拒まずというスタンスを貫いていること。3) 活動や事業の継続性が認められ、地域に根差していること。4) 幅広い活動や事業を通して、参加しやすい選択肢を提示していること。

## 3. 2015年度の成果

### 「貧困問題 子どもの貧困」

#### (1) 聞き取り調査

対象は以下のとおりである。

NPO法人青少年の自立を支える会「月の家」、NPO法人サバイバルネット・ライフ「シリウス」、NPO法人だいじょうぶ「Your Place ひだまり」、NPO法人キッズシェルター「にじのいえ」、NPO法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク「要町あさやけ子ども食堂」

栃木県保健福祉部子ども政策課、小山市子育て・家庭支援課、宇都宮市子ども部子ども家庭課子ども家庭支援室

#### (2) 2015年度の事例調査を通じた考察

現代社会の子どもの貧困は、見えづらい中にも確実に広がっている(2012年に子どもの相対的貧困率は16.3%と最悪を更新)。特に一人親家庭の貧困率は54.6%と高く、虐待や養育ネグレクトにつながる要因ともなっており、社会的な支援が必要な状況である。

経済的な貧困の中にいる家庭は、周囲とのつながりを持ちづらい環境に追い込まれて関係性の貧困、社会的な孤立に陥っている事例が多い。こうした負の連鎖のために、自立への道が見通せなく

なる。この状況は高齢者の孤立の問題とも共通している。それらの課題を少しでも解きほぐすために、以下のような取り組みが必要であると考える。

#### 1) 支援を必要とする子ども達を居場所につなげるための仕組みづくり

一人でも多くの子どもたちが居場所を活用するためには、複数の居場所づくりが必要であり、その実現には行政の関与が重要となる。要支援児童放課後応援事業を継続的に発展させることで、設置地域の増加や域内の設置場所の増加を進めることが望まれる。こうした居場所の運営には、ノウハウを有する人材が不可欠である。県内4つの事例で紹介したNPO法人は、もともとDV被害者や一人親家庭への支援をしており、既に組織内で十分なノウハウを有していた。さらに受託内容に含まれない幅広い支援へも対応できる強みがあった。場所を増やすためには、こうした組織と人材が当然必要となる。そのためには、①貧困問題に関心を持ち、そこに関わる意思を持つ人たちのすそ野を広げるための広報や啓発活動、②関心を持った人が実際に活動できる機会の創出、③実際に人と機会をつなぐコーディネーターの確保、が重要である。

#### 2) 関心を持った人が実際に活動できる機会の創出

貧困問題への社会的解決を進める上で、関心がある人が参加できる取り組みを展開する必要がある。子ども食堂は、食事の提供を通して、交流の機会と居場所を提供しており、自然な形で支援が広がっている。「普通の家庭」を知らない子ども達に、食事を通して「普通」の意味を知る機会にもなっており、広い意味では教育的な意味合いがある。その取り組みを通して、貧困の連鎖をどう断ち切るかを考える格好の機会とも言える。そこから、子どもの貧困や高齢者の孤立など、社会的包摂の実現を目指すネットワークが築かれていくであろう。

#### 3) 子どもの貧困に取り組む団体のネットワーク構築

個々の取り組みを支援し、広報・啓発活動を担当し、コーディネート機能を発揮するためにも、貧困問題に取り組む組織のネットワーク化を図る。

(宇都宮大学教育学部教授、認定NPO法人宇都宮まちづくり市民工房理事長)

公開学習会の基調報告に調査対象としてあがっていたNPO法人だいじょうぶは、日光市で直接子どもを支援する先駆的な活動をしています。代表の畠山さんにその活動の一端を紹介させていただきます。

### 支援を必要としている子ども達

畠山由美

#### 子ども支援の動向

2013年6月、「子供の貧困対策の推進に関する法律」が全会一致で可決・成立しました。この法律に基づき、翌年8月には、「子供の貧困対策に関する大綱」が閣議決定されています。この法律の基本理念は、「子どもの将来がその生まれ育った環境により、左右されることのないよう、また、貧困が世代を超えて連鎖することのないよう、必要な環境整備と教育の機会均等を図る」というものです。

同じ頃、子どもの貧困率が発表され、日本の子どもの6人に1人が貧困である、と報道されたことで、「この豊かな日本で、そんなことが起きているの？」という驚きと「何とかしなければ」という思いが市民の中に起こり、子ども支援の輪が急速に広がりました。

#### 「だいじょうぶ」の活動

私たちNPO法人だいじょうぶは、子どもへの虐待を無くすため、相談から支援まで、切れ目のない活動をしています。

家に食べるものがない、ガスが止まっていてお風呂に入れないなど、家庭での生活がままならない子ども達に、ふつうの暮らしを提供するため、市内に2か所、子どもの居場所を開いています。子ども達は学校から居場所「ひだまり」に帰って来るとおやつを食べたり宿題をしたり、思い思いに過ごします。夕食もお風呂も済ませて家に帰る、という普通の家庭の日常です。子ども達にとっては、第二の家庭です。学校でも塾でもありません。

「家庭」は、子ども達にとって、安心できる場所、無条件で受け入れられる場所です。わがママを言え、甘えられる所です。人が生きるために必

要な衣食住や心の安定、充足を得る場所です。子ども達は、安心の中で認められたり、褒められる経験をすることで、心の栄養を補給しながら、社会に出る準備をしていきます。

#### 子ども達への理解と対応

私たちが支援をしている子ども達は心に様々なダメージを受けています。自分のことを一番理解してほしい親から否定され、認めてもらえない悲しみ。周りと同じことができない、という悔しさ。学力の遅れからくる焦り。将来への不安……。それらは子どもの心の内に蓄積され、次第に怒りの感情となって爆発します。周りの人たちの優しさを信用できず、試し行動ともいうように悪態をついたり、言うことをきかなかったりしながら大人の愛情を繰り返し確認します。また、愛情に飢えていることから、大人との適切な距離感が保てず、ベタベタと甘えてくる子どももいます。

そんな子ども達に私たちができることは、ただただ忍耐をもって子ども達を受け止めること。愛着形成が乏しく、関係性が出来ていない子ども達にふつうの子育ては通用しません。圧倒的な経験不足からコミュニケーション能力も育っていないため、ふつうの会話のキャッチボールができないこともあります。基本的な生活習慣が取得出来ない子、偏食がある、行儀が悪い、わがまま放題の子ども達に、こちらはつい行動を正したり、多くのことを求めたくなります。しかし、母子関係が希薄で、愛着形成を築いていない子ども達へ関わる時にまず必要なのが、心の安定や充足でしょう。その次に行動を正したり、躱けるなど、教育的な関わりが必要となってきます。「あなたは大切な存在だよ」「あなたはあなたでいいよ」と声をかけながら、自尊感情を回復させ、自己肯定感を高めるような働きかけが望ましいのです。

しかし、そうは言っても私たちも生身の人間です。そういう子ども達だと分かっているだけでも、乱暴な言葉を投げつけられれば傷つきます。何回言っても行動が改善されないと落ち込んだり、イライラしたり、怒りたくもなります。子ども達の言動に振り回される日々は大変なものです。そんな時、スタッフには、怒ってもいいし、苛立ってもいいけれど、その気持ちを正直に子どもに伝えて欲しい。そして子どもの気持ちを聴いてあげて欲しいと話しています。そして、家族のような関わりをしてほしいのです。

家族には、厳しい人も、優しい人もいます。怒る人もいれば、逃げ場になる人も必要なのです。色々な大人がいること、力で抑える人ではなく、きちんと話も聴いてくれる大人がいることを子ども達に知ってもらいたいのです。ほとんどの子どもは周りにモデルとなるような大人を知りません。大人が生活を楽しんだり、生き生きと仕事に取り組む姿を通して、子ども達は大人になる事に夢を膨らませ、期待を持ちます。子ども達は、私たち大人がどのように日々の問題に向き合い、解決していくかを見えています。スタッフもお互いを尊重し合い、協力しながら業務をこなしてほしいと思います。

子どもの貧困対策の講演会で配られた冊子に、「居場所づくりの取り組みは、否定的な自己像を押し付けられている子ども達が、仲間との交流を通じて集団的に、しかも一人ひとり自立して、肯定的自己像を取り戻すのを支える取り組み」だと書いてありました。普通の家庭で育った子ども達は周りの大人、特に親からの温かい関わりの中で可愛がられる経験を経て大きくなります。成長の過程で、様々な成功体験（「よくできたね」「頑張ったね」など）を積みながら肯定的な自己像を確立していきます。しかし、そうでない環境の中にいる子ども達は、泣いては「うるさい」と怒られ、失敗も許されず、否定される体験を繰り返す過程で、自己肯定感が持ちにくく、自尊感情が育ちません。これは、安心して人と繋がり、自信を持って世の中に出て行こうとする、自立を妨げることになります。

今、注目を集めている「子ども食堂」も、様々な子ども支援の取り組みも、貧困や虐待の連鎖を

断ち、世の中に自立できる子ども達を育てることが目的です。

そこに集った子ども達が支援を通して、ひとりの人間として大切な存在だと実感でき、自分の持っている能力に気づき、それを発揮するチャンスが与えられるなら、それは子ども達が貧困から抜け出させる手がかりとなることでしょう。

### 今から子どもの支援を考える人たちに

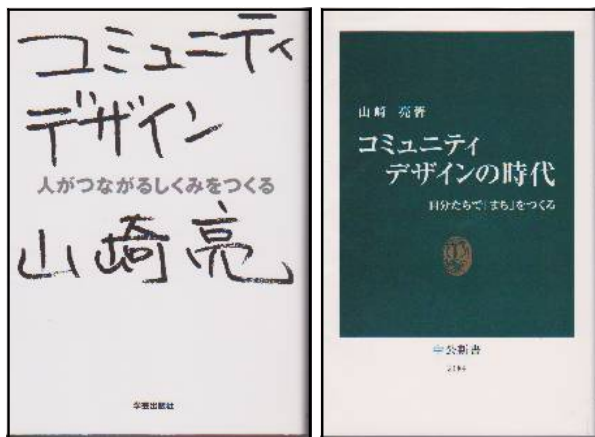
子どもへ関わるのに、方法は様々です。衣食住の提供、遊びや学習の支援、話し相手など。どれも子ども達が健全に生きて行く上で必要な関わりです。まず、支援者が無理をせず出来ること、楽しいと思えることをしていくのが一番です。また、同じ思いを持つ者、力を合わせ、励まし合っている仲間も必要です。「だいじょうぶ」も、設立の時には、「子どもへの虐待を無くそう！」という思いを持つ有志が集まり話し合いを重ねました。行政の方、議員さん、お医者さん、学校の先生、市民団体の仲間達など、様々な顔ぶれが集まり他団体への視察、議論も重ね、それぞれの立場で出来ることを精いっぱい協力しあいました。特に、行政の中にも賛同者、理解者を得られたお蔭で官民協働で子どもの虐待防止に取り組む土壌ができました。「だいじょうぶ」は現在、日光市から4つ、栃木県から1つの委託事業を任されています。

このように、多くの方の具体的な助けや経済的支援のお蔭で、10年間活動を続けて来ることができました。一人一人の、子どもの幸せを願う祈りと思いが天に届いたのだなあと感じています。これからも次の世代を担う子ども達が心身ともに健康に成長できるよう、活動を続けていきたいと思っています。

(認定NPO法人だいじょうぶ理事長)

※だいじょうぶHP <http://www.npo-daijobu.com/>

※アスクでは2014年5月11日に、公開学習会「今の子どもたちと子育て世代の困難、地域での支援のあり方」を開催しました。NPO法人だいじょうぶの畠山さんには、パネラーとして参加していただきました。ニューズレター53号にその時の公開学習会の報告が掲載されていますので、ご参照ください。



コミュニティデザイン  
人がつながるしくみをつくる  
山崎 亮 著 学芸出版社刊  
1800円+税 2011年5月発行

コミュニティデザインの時代  
自分たちで「まち」をつくる  
山崎 亮 著 中公新書 2184  
860円+税 2012年9月発行

山崎 亮(やまざき・りょう) 1973年、愛知県生まれ。コミュニティデザイナー。株式会社studio-L代表。東北芸術工科大学芸術学部コミュニティデザイン学科教授(学科長)。人と人のつながりを基本に、まちづくりのワークショップ、市民参加型のパークマネジメントなど、かずかずのプロジェクトに取り組んでいる。著書に『ソーシャルデザイン・アトラス—社会が輝くプロジェクトとヒント』(鹿島出版会)、共著に『まちの幸福論 コミュニティデザインから考える』(NHK出版)、『藻谷浩介さん、経済成長がなければ僕たちは幸せになれないのでしょうか?』(学芸出版社)ほか。

本に呼ばれたとしか思えない。

偶然書店で手にしたコミュニティデザイナー・山崎亮さんの本に魅せられて、次々5冊も読んでしまいました。(もっとも山崎さんは情報収集のためテーマに関連する棚の本をすべて買うこともあるそうなので、5冊程度では笑われてしまいますが)

コミュニティデザインとは何か。みんなが共同して使う場所があれば、きっと自然に人々のつながりができるだろうという発想のもと、ある地区を設定して、その物理的な空間をデザインすることがかつてのコミュニティデザイン。それに対し山崎さんはもともと建築やランドスケープなどモノのデザインに携わっていたけれど、「それだけでは解決できない何か」が少しずつ見えてきて、それがじぶんのなかで無視できない大きさに膨らんで・・・モノをつくるのをやめると人が見えてきたといいます。そして自分のことを「モノをつくらないデザイナー」、コミュニティデザイナーという自分の仕事を「人と人がつながる仕組み」をつくることでまちを元気にする仕事と表現しています。

『コミュニティデザイン』には、まちづくりワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、市民参加型のパークマネジメントなど山崎さんがこれまで携わってきたいくつものプロジェクトの事例が書かれています。それはどれを読んでも本当

にワクワクします。だからといってそれをそのまま真似してうまくいくわけはありません。しかし、あらゆる分野の知識を総動員して人のつながりを作り出そうとする山崎さんとそのチームの取り組みには、まちづくりだけでなくさまざまな課題解決のためのヒントがあふれています。まちづくりの主役はその土地その土地の人たち。ゴールは自分たちのまちが元気になっていく方法を自分たちで考えていけるようになること。本当の意味での市民参加、住民参加とは何か、考えさせられます。

『コミュニティデザインの時代』は、講演会場で多く出る質問に答えるように文章を重ねていったとまえがきにあります。コミュニティデザインという言葉をはじめて聞く人にもきっと人がつながる魅力が伝わることでしょう。

—1人でできることは明日からでもすぐ始めればいい。10人でできることはチームですぐ始めればいい。100人でできることや1000人でできることは行政と協働して進める必要がある。何でも行政に頼むのではなく、自分たちでできることは自分たちでやり、どうしてもできないところだけを行政と協働する。—

知らず知らずのうちに、やってもらうことに慣れすぎてはいなかったか。まだまだ自分にできることがたくさんあるはず。いずれもそんな気持ちにさせられる、一步を踏み出す力がもらえる本です。

(Y. N.)

家族介護者の皆さん、あなたのため息をはきだしてください。

### キーワードは「穏やかさ」

連休の最中の5月3日夜、母は突然、天に召された。入所していた老健から「呼吸が変です」という電話を受け、すぐに駆けつけると、すでに意識はなく、呼吸も戻らなかった。延命治療は望んでいないことを入所時に伝えていたので、あっけないほどの最後だった。2週間後の「遠足」を誘われていたほどだから本当に急な出来事だった。

大正12年生まれの母は95歳。父が死んで10年間、横浜市で一人暮らしをしていたが、83歳の時に、ごく初期の肺がんが見つかり、宇都宮の病院で手術をしたのをきっかけに、娘である私の所に移ってきた。以来、夫と私の3人暮らしとなった。

母は80代は本当に元気で、女学校時代の友人に会いに、たびたび一人で新幹線に乗って上京していた。毎週日曜日には私と一緒に教会に通い、そこでも楽しく過ごしていた。

90代になってから老いが始まった。91歳の時、旧黒磯市内の病院へ救急搬送され、この時の主治医の対応に私は強い不信感を持った。

この頃から2回骨折した。2014年までの2年半の間に、7回救急車を呼んだことになる。でもそのつど復活し、元気になってお気に入りのデイサービスにまた通っていた。

1年間に2回の骨折で、病院、リハビリ病院での生活が長くなり、認知症がだんだん出てきた。それでも女学校時代の友人の話や、昔の思い出など、楽しそうに話し、食欲もあり穏やかにしていた。とうとう車椅子の生活になってしまったが、老健で何とかつかまれば自力で立てるようになり、2015年の5月に自宅に戻った。訪問診療、訪問看護、デイサービス、ショートステイの利用を担当の方々と話し合い、介護保険を目一杯使って、環境を整えた。母も久しぶりの自宅にほっとしたのか、体重が5キロも増えたのには驚いた。自宅での穏やかな生活が8ヶ月続いた。

今年の1月半ばに体調を崩し、先入院でここだけは避けたいと思っていた病院へ再び入院することになった。建物は立派になったが、内容は以前と全く変わっていなかった。

母は入院した時はかなり重篤だったが、また復活。毎日病院に行っていた私は、母をまた以前入所していた老健になんとか行かせたいと思っていた。というのは、以前入所していた時に肺炎になり、その時の対応がとても穏やかだった。過剰な医療はしない、それでも本人に力があれば復活する、というように。母は元気になって自宅に戻ってきたのだった。あの老健に移したい、というのが私の願いだった。ところがそうは簡単にいかなかった。

療養病棟に移され、そこで延々と2ヶ月。老健に移るための書類も「医師のヒマな時に書いていただくから2、3週間かかる」と平然というソーシャルワーカーの意識。この頃私は、家族としての苦情をどこかに伝えたいときがしたが、どこにもなかった。第三者評価機関が医療にも必要と思った。

母はようやく4月半ば、新緑の美しい日に先の老健に移った。病院では表情も乏しくほとんど無言だったが、週2回の入浴と、食事のたびに車椅子でホールへ出て刺激が多いのか表情が戻り、良く喋るようになった。

母の年齢を考えると、死ぬ時は「穏やかに」死んでほしい、というのが私の正直な気持ちだった。そして力があればまた家に戻ってきてほしいと願っていた。

入所して2週間で、母は「穏やかに」天に移された。

## アスクの活動から

### 外部評価・福祉サービス第三者評価活動

評価結果の公表（2016年7月26日現在）

《地域密着型サービス外部評価》WAM NET (<http://www.wam.go.jp/>) に評価結果公表  
前年度調査分：グループホームレガール、ミカーサ、グループホーム錦（以上、那須塩原市）、  
グループホームこころ黒羽（大田原市）、グループホームラパス（矢板市）  
グループホームホームタウン宝木（宇都宮市） が公表されています。

《福祉サービス第三者評価》とちぎ福祉サービス第三者評価推進機構HP <http://www.tfhs.jp/>  
ただいま、障害者支援施設、公立保育園、私立保育園の第三者に取り組んでいます。

《社会的養護関係施設第三者評価》

全国社会福祉協議会HP <http://www.shakyo-hyouka.net/search/index.php>

社会的養護関係施設（児童養護施設、乳児院、児童自立支援施設、情緒障害児短期治療施設、母子生活支援施設）は2012年度より3年に1回、第三者評価を受審することが義務づけられました。今年度は2015年度からの第2クール2年目となり、アスクは児童養護施設の評価に取り組んでいます。

### アスク定期総会

5月8日（日）、アスク総会を開催し、2015年度事業報告・決算、2016年度事業計画・予算および役員改選（8名全員留任）、定款変更（役員任期の伸長規定追加）が承認されました。会員には総会資料をお届けします。

### アスク公開学習会「暮らしを支え、ともに生きる社会とは～ 貧困と地域社会～」

5月8日（日）宇都宮大学教授陣内雄次さんから基調講演、フードバンク大田原の實さんと藤田さんから地域での活動（フードバンク、居場所づくり、子ども食堂など）を報告していただきました。基調講演については今号に掲載されています。フードバンク大田原の活動は、今後のニュースレターで取り上げる予定です。

## インフォメーション

### ケアラーズ・カフェ

ケアするひとが主役になって不安や悩み、想いを話し合いながらつろぐ場が、那須塩原市と那須町にあり、ほぼ毎月開催されています。関心のある方は下記に連絡してみてください。

那須塩原市 **しもつかれいど** for ケアラー

連絡先：ソーシャルケアワーカー集団「しもつかれいど」（那須塩原市関谷1228-14）  
090-4006-8739 児玉幸弘

会場：小規模多機能型居宅支援事業所「ぬくもり」（那須塩原市三島4-28-2）

那須町 **野の花**

連絡先：傾聴と在宅支援のボランティア・のぼらん（那須町高久甲496-12）  
080-1321-0811 竹原典子

会場：小規模多機能型居宅支援事業所「なでしこ」（那須町寺子乙3972-2＜黒田原地区＞）

#### 寄稿 歓迎

- ◆次号のニュースレターは10月発行予定です。読者からの情報や投稿を歓迎いたします。
- ◆書籍紹介欄に取り上げるのにふさわしい書籍をご紹介します。新本、旧本を問いません。1000字程度の紹介文を付けていただくとありがたいです。
- ◆原稿はニュースレター発行元へ、9月末までにメール又はFAXでお送り下さい。